ZOSHIGAYA MISSHIONARY MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第41（100周年記念）号
2007年11月1日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒171－0032 東京都豊島区雑司が谷1－25－5　TEL / FAX（03）3985－4081

2007年　旧マッケーレブ邸（雑司が谷旧宣教師館）建築100年!!

建築当初の雑司ヶ谷学院の庭で、はかま姿でテニスをする学生。中央にマッケーレブがいる。（建物は半分しか完成していない）（写真①提供野村基之氏）

雑司ヶ谷幼稚園の園児たち。後方に宣教師館が見える。（昭和3年）（写真②提供前島郁子氏）

原っぱへ遠足。後方がハウゼの家（のちに異人館と呼ばれた）（昭和3年）（写真③提供前島郁子氏）

雑司ヶ谷学院誕生

1892年4月12日、テネシー州出身のJ・M・マッケーレブら宣教師一行は横浜に到着します。マッケーレブは築地の外国人居留地に住み、キリスト教伝道と慈善活動を行う一方で、日本の将来は立派なクリスチャンとしての品格を備えた青年の育成にあると考え、1907（明治40）年10月、雑司ヶ谷亀原64番地（現・雑司が谷1－24－5～6）に雑司ヶ谷学院を開設しました。同時に隣に建てられた自宅が雑司が谷旧宣教師館です。

雑司ヶ谷学院はキリスト教精神で運営する寮として宣伝され、昼間はそれぞれの学校で学び、夜、聖書と英語の授業を必須としました。著名な寮生には当時朝倉文夫の門下生で忠犬ハチ公の制作者の安藤照（現在のハチ公は子息・武氏の作品）がおり、芸術家、政財界で活躍する人々を数多く輩出しています。しかし関東大震災で建物の一部が損壊し修理資金の目途がたたず、マッケーレブは雑司ヶ谷学院を閉鎖します。土地の一部は売却され、その資金をもとに幼稚園が開かれました。

雑司ヶ谷幼稚園の創設

1928（昭和3）年、雑司ヶ谷幼稚園創設。大正時代、東京の都市化にともない豊島区周辺は新興住宅地となり、自由学園や立教大学などの学校の新設・移設が相次ぎました。御茶ノ水大学、日本女子大学や早稲田大学にもほど近く、子弟の教育を目的として富裕な人々が移り住んできました。マッケーレブの幼稚園に入園したのはそのような家庭の子どもたちであったといわれます。開設当初は女性宣教師・サイパート女史を中心に保母、助手2名で30名の園児を保育したと『道しるべ』創刊号（教会機関誌）に記録があります。

雑司ヶ谷での生活

マッケーレブは雑司ヶ谷でも布教活動を開始し、学院開設翌年の1908（明治41）年１月26日には近隣の子どもたちを集めて日曜学校を開きます。当時通った子どもたちは、マッケーレブが熟したグースベリーを頬張らせてくれた事や、戦争ごっこをするととても叱られた事などを思い出として語っています。

マッケーレブは1861年、南北戦争勃発の年にテネシー州ナッシュビルに生まれました。生後六ヶ月で、良心的兵役拒否者であった父親を北軍の流れ玉で亡くしたマッケーレブは、来日後アメリカ大使館の独立記念日式典への召集に対して、「私の国は天にある」と言って招待を断り、大使の怒りを招きパスポートを剥奪されるというエピソードもあります。

また近所の大人達はマッケーレブを「マツケチさん」（ケチなマッケーレブの略）と呼んでいたそうです。アメリカの支援者たちからの送金が途絶えるとお金がなく、行商人が来ても食べ物を買えず、畑でとった野菜を生のまま食べてはお腹をこわしていたという話もあります。

３人の子どもが学齢期を迎え、1906（明治39）年家族は帰国しますが再来日することはなく、45歳から34年間マッケーレブは単身雑司ヶ谷で暮らしました。畑仕事から外壁のペンキ塗り、そして暖炉の薪割りまで一人で賄いました。近所の農家の人が畑仕事を手伝ったり、またマッケーレブが物品を借りにいったりなどのお付き合いもあったようです。

薪を割るマッケーレブ。（昭和初期）（写真④提供前島郁子氏）

マッケーレブの帰国と館の保存

1941（昭和16）年10月、日本永住を希望していたマッケーレブでしたが日米開戦のため帰国を余儀なくされ、建物を売却して離日しました。1982（昭和57）年９月、旧マッケーレブ邸を取壊しマンション建設が公示されたことを機に、雑司ヶ谷幼稚園の卒園生を中心として地域住民による建設反対運動が起こります。ちょうどその頃、明治から昭和のはじめの建築が次々と壊されていくことに懸念を覚えた日本建築学会は、後世に残したい建物2,800棟をピックアップし、調査報告書（『日本近代建築総覧』）を発表しました。その中に旧マッケーレブ邸が取り上げられていたことから、運動は同学会の応援を受けて建物保存運動へと展開していきました。

地域住民による豊島区への保存の陳情およびアメリカ大使館やキリスト教系大学そしてメディアへの熱心な働きかけの結果、運動開始から僅か４ヶ月後の12月に豊島区は建物の保存を決定しました。これは歴史的建造物の保存が、住民運動によって実現した先駆的事例であるといわれています。

東京都有形文化財として

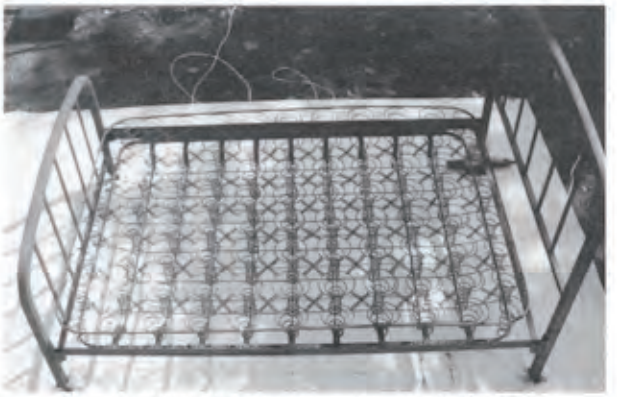
建物保存修理工事を経て1989（平成元）年１月、旧マッケーレブ邸は雑司が谷旧宣教師館として一般公開されました。1999（平成11）年には東京都指定有形文化財となり、2004年には開館以来の当館活用の事業等が評価され、東京文化財ウィーク2004において都知事賞を受賞しました。

現在も、自分たちの住む町を愛し地域の歴史を掘り起こし、語り継いでいこうと願う人々が集い、『赤い鳥』や小川未明の童話の読み聞かせや昔ばなしの紙芝居を行っています。

また中庭にマッケーレブがグースベリーを植えていたのにちなみ育て易いブルーベリーを栽培し、毎年夏休みに親子でブルーベリー摘みをする事業も行っています。

母の日のガーデンコンサートも定着し、秋の文化財ウィークには近隣の建築を探訪する、都の西北たてものそぞろ歩きの実施や地域ゆかりの資料展示を行い、区内外からたくさんの見学者が訪れるようになりました。

雑司が谷旧宣教師館　建築100周年を記念して



三度、太平洋を横断したベッド。（写真⑤修理中）

（1）マッケーレブ愛用のベッド里帰り

2007年10月、マッケーレブ愛用のベッドを展示しました。これまで館には当時使われていた家具の実物はライティングデスク１点あるのみでしたが、篤志家の渡辺進氏がこのベッドの存在を知り、所有者の野村基之氏(※1)に懇請し、ベッドの里帰りが実現したものです。

【ベッドの由来】

1892（明治25）年、日本伝道へ向けてケンタッキー州を出発したマッケーレブ一行は、サンフランシスコでオハイオ州立大学留学を終え帰国の途にあった石川角次郎と出会い、ともに出航します。日本に到着後、かれらは協力し合って宣教活動を行いました。このベッドはその当時、石川角次郎がマッケーレブに贈ったものです。石川角次郎は明治女学校(※2)、学習院で教鞭をとり、のちに聖学院初代校長となりました。

1941（昭和16）年、マッケーレブは帰国。死後、ベッドはマッケーレブを敬愛する野村氏によって、マッケーレブの他の遺愛品とともに日本に引き取られました。

（※１）キリスト教甲斐小泉教会独立伝道者。昭和30年代アメリカ留学時の身元保証人を引き受けたのがマッケーレブ宣教師長男・ハーディング氏です。旧マッケーレブ邸が雑司が谷旧宣教師館として開館するにあたり、マッケーレブ関係資料の大部分は野村氏により提供されたものです。

（※２）1885（明治18）年創立。日本人主体のキリスト教主義女学校。1891（明治24）年麹町から巣鴨に移転。教師には北村透谷、島崎藤村らの新進を擁し、羽仁もと子、相馬黒光、野上弥生子ら先駆的人材を生み出しました。

アリス・ミラーのオルガン。（写真⑥）

（2）アリス・ミラーのオルガン展示

マッケーレブは礼拝に楽器を使用しませんでした。仲間の宣教師、アリス・ミラーは千駄ヶ谷教会において、信者たちが望んだことからオルガン演奏を行いました。マッケーレブはミラーの教会に対して資金面など様々な援助を行いました。ミラーのオルガンの所在が判明し、野村氏のご好意により展示されることになりました。

【アリス・ミラーとオルガン】

マッケーレブとともに来日した女性宣教師たちは、貧困家庭の子どもたちや不幸な女性の救援活動に力を注ぎました。アリス・ミラー（(1851～1928）ケンタッキー州出身）は四谷鮫が橋スラムで慈善学校を開き、徳永恕（ゆき）（のちに野口幽香・森島みねが創設した二葉保育園二代目園長となる）らと協力し合い、日本の保育事業の礎を築きました。またミラーは、明治女学校の二代目校長の巌本善治夫人・若松賤子（しずこ）（『小公子』翻訳者）とも親交を深めたといわれています。

その後ミラーは千駄ヶ谷に教会を開設しますが、1928（昭和３）年77歳で亡くなり雑司ヶ谷霊園に埋葬されました。戦時下、千駄ヶ谷教会は道路拡張のため取壊しとなり、ミラーのバイブル・ウーマン(※3)であった倉知正猪は、遺品のオルガンを手放すことなく守り続けました。

（※３）宣教師たちの活動を補佐する役割を果たす女性であり、宣教師自らが女性の養成を行いました。

これらの資料が物語るもの

教育普及や社会改良事業を通して、日本の近代化の指導的役割を果たした人々と宣教師たちの交流があったことが、これらの古い資料から窺い知ることができます。

マッケーレブ＆旧宣教師館略年表

1861. 9. 25	南北戦争勃発の年、テネシー州ナッシュビルのピューリタンの家庭に生まれる
1875	14歳、洗礼を受ける
1888　春	レキシントンのカレッジ・オブ・バイブルに入学。世界伝道の刺激を受ける
1891	デラ・ベントリー嬢と結婚
1892. 3. 26	サン・フランシスコを出航。横浜に到着（4月12日）
（31歳）	外国人の居住制限により、築地外国人居留地12番館に住む。（この家で、1905（明治39）年1月1日、バーサ・クローソン女史、女子聖学院開校）
1892. 5	①神田で児童を集めて慈善学校を開校 ②四谷・学習院横（現新宿区若葉町教会付近）で英語を教える ③四谷鮫が橋スラムで宣教と奉仕活動を開始。アリス・ミラーはデントン嬢やワイリック嬢と幼児保育活動を行う
1902. 9	小石川に学生寮Tokyo Bible School開寮、雑司ヶ谷学院の前身となる
（41歳）	
1907. 10	・雑司ヶ谷学院開設。キリスト教精神で運営する男子寮であり、昼間はそれぞれの学校で学び朝夕に聖書と英語の授業を必須とした。主な寮生には渋谷駅前の忠犬ハチ公彫塑者安藤照氏、ユネスコ国内委員会事務総長をされた武藤義雄氏、法政大学教授となった満下竜太郎氏など ・宣教師館建設 宣教師が多数来日し、雑司が谷を基地として宣教と奉仕活動が地方にも広がる。徳富芦花や立教大学初代学長元田作之進、朝倉文夫など、教育者・芸術家・外交官との交際も広く、近代化を目指すインテリの間で学院は有名になる
1923. 9. 1	関東大震災。米国教会の援助を得て、アンドリュース嬢や、苗村イキ嬢とともに上野、本所、深川近辺まで救助物資を配付。学院の建物一部破損。資金難で修理再建不可能
（62歳）	
1928	雑司ヶ谷学院閉鎖 雑司ヶ谷学院売却。売却資金で幼稚園創設。
1930	土地一部売却のため宣教師館を曳家（現在地へ）
1931. 1初頭	朝鮮伝道視察
1935. 1. 4	上海、香港、マニラ、広東の伝道を三ヶ月で視察
1936. 11末	白内障手術のため一時帰国
1937	日本に骨を埋めることを覚悟で再来日
1938. 9	日系二世女性ロレイン・ハセガワがサンタ・ローザから秘書として来日
1940. 10	ニュージーランドを視察
1941. 2	米国領事館より米国人全員に帰国を促す連絡が出される。自宅を13,172ドルで売却し、アンドリュース嬢、サイパート嬢の生活費に充当
（80歳）	
1941. 10. 22	タイヨウ丸にて帰国
1943～1953	ロサンゼルス在住。ペパーダイン大学名誉教授。東洋学などを教える
1943	「良心的兵役拒否者を助ける委員会」組織
1953. 11. 1	ロサンゼルスにて92歳で没
……	……
1982. 12. 27	旧宣教師館売却、住民保存運動により豊島区購入
1983. 11	応急補修工事（1984. 2完了）
1984. 12. 20	保存修理工事（1985. 12. 20竣工）
1987. 9. 1	旧宣教師館、区登録有形文化財第1号
1989. 1. 26	豊島区立雑司が谷旧宣教師館一般公開
1992. 11. 10	豊島区指定文化財となる
1994. 4. 1	豊島区立郷土資料館分館となる
1999. 3. 3	東京都指定有形文化財（「旧マッケーレブ邸」）となる

編集後記

念願の写真入り100周年記念号お届けします。来館者から「ここは異人館ですか」というご質問をよく受けるので、写真③を掲載しました。異人館（現・南池袋4丁目8番あたり）は大分前に取り壊されてしまいました。様々な方のご協力により、『赤い鳥』や小川未明など雑司が谷にちなんだことの事業も定着しつつあり嬉しい限りです。今後ともよろしくお願いします。

（文責・浜地）

豊島区立 19.11.19 郷土資料館